慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクスの階級論について：一つの覚書 -
Sub Title	A criticism on Marx's theory of social class
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.1 (1949. 1) ,p.15- 31
JaLC DOI	10.14991/001.19490101-0015
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490101-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

起る評價（見積）と諸財貨生産後に起る成果計算と區別せねばならぬ。前者の第一の部類に屬する評價問題は豫算編成（Budget Rechnung）資本調達を包含するものであり、原價計算、年次成果計算、短期成果計算は經營價値計算の第二部類に屬する主要問題である。それ等の成果に基いて狹義の經營組織の問題が展開される。これは統制と決定を取扱ふものではなくて經營組織の意圖を以て組織上の諸方策を解明するものである。此處に議論の對象となつて居る純然たる機能上の動的諸問題がある。最適經營組織の問題は之等に關する多數の諸問題を內包する。即ち操業度、固定費の問題、經營比較の問題、相對的最適經營能力維持の見地に立つ價格政策の問題等何れも個別經濟の必然的な給付交換によつてであつて國民經濟の內部に於て行はれねばならぬ價値並に價値計算から發生する問題である。

註1　Schmalenbach; Selbstkostenrechnung und Preispolitk 2 auf. S. 13.

マルクスの階級論について

――一つの覺書――

平井新

一

マルクシズムは一般に勞働者階級解放の理論であるといわれているが、事實マルクス―エンゲルスの諸著作中には、階級別、階級利害、階級對立、階級意識、階級鬪爭等の言葉が不斷に使われていて、流石に階級的學說であるとの感を深うすると共に、階級の概念がマルクシズムの體系において占める地位の重要なることに氣付くのである。

一般に社會科學においても階級概念については異說區々として定まるところがない有樣であるが、それは暫く措いて、マルクスは階級概念をどうように理解していたか、この問題をたずねて見たいと思う。

われ〳〵が不審に思うことは自ら勞働者階級の代辯者を以て任じ、あれほどに「階級」を口にしたマルクスの數多い著作中にも階級論に關する系統的な作品が全くないことである。じかし、このことが彼がこの問題を輕視したためでないことは遺稿「資本論」第三卷の最後尾（第七篇（第五十二章）に「諸階級」の一章があることによつても親われる。ところが眞に遺憾なことには、この一章も僅かに一頁程度の斷片で未完成のまゝに中絕してしまつているので、彼が階級論の眞意は無論のこと、その片影すらも容易に掴めないという有樣である。しかし、たとえ斷片でも數少ない彼の階

級論の中で最も貴重な資料であることはいうまでもない。尙この外にマルクス―エンゲルスが比較的多く階級問題を取扱つている著作は「哲學の貧困」（一八四七年）、「共産黨宣言」（一八四八年）「フランスの階級闘爭」（一八五〇年）「ルイ・ボナパルトのブリューメル十八日」（一八五一年）「革命及び反革命」（一八五二年）「反デューリング論」（一八七八年）等である。われわれは、これらの諸作に斷片的に散在している章句を收拾し、補綴してマルクス―エンゲルスの抱いていたと思わるゝ階級像を出來るだけ正確に再現して見ようと思うが、無論その間には殆ど推測の域を出でない底の私見のあることを豫め斷つて置きたい。

一

マルクスの階級論を知るための第一の手引は前に述べて置いた通り、遺稿資本論第三卷後尾の一章「諸階級」である。全文僅かに一頁位、全くの斷片で中絶されている。マルクスはこゝで階級を形成するものは何であるかと設問して、これに答えようとしたけれども、その答は僅かに階級の本質は何でないか、言いかえれば如何なるものが階級を造らないかという消極的解答に止まつている。この一章のもつ重要性に鑑みて、今左に煩を厭わず全文をかかげて見よう。

「それ〴〵勞銀利潤及び地代を以て所得源泉となしているところの單なる勞働力の所有者たちと、資本の所有者たちと土地の所有者たち、換言すれば、賃銀勞働者たちと、資本家たちと、地主たち――これ即ち資本制生産方法に立脚せる近世社會の三大階級をなすものである。

イギリスにおいては、近世社會がその經濟的體制の上で最も廣汎に最も古典的に發展したことは爭い難きところである。が、そのイギリスにおいてすら、右の階級編成は純粹の形には現れておらぬ。ここでも到る處に（尤も農村地方では都市に比べると比較にならぬほど少ないのであるが）中間的な過渡的な諸段階が限界決定を紛わしくしている、がこれは我々の考察にとつてはどうでもよいことである。生産手段をますゝ勞働から分離せしめ、分散した生産手段をますゝ大きな諸群に集積せしめることが、即ち勞働を賃銀勞働に、生産手段も資本に轉化せしめることが、資本制生産方法の不斷の傾向であり、發展法則であることは我々の既に見た通りである。そして、この傾向には また、他面において、土地所有が資本及び勞働から獨立的に分離すること、即ち一切の土地所有が資本制生産方法に照應した土地所有形態に轉化することが照應する。

先づ解答を要する問題は、一の階級を形成するものは何かということである。そしてこれが解答は賃銀勞働者、資本家及び土地所有者たちをして三大社會階級を形成するに至らしめるものは果して何かという他の問題の解答から自然に結果してくる。

一見したところ、所得及び所有源泉の同一ということがそれであるように見える。即ちこれらの三大社會群おのゝの組成分子、そのおのゝを形成するところの個々人は、それ〴〵勞銀利潤及び地代によつて、自己の勞働力、自己の資本、自己の土地所有を利用することによつて生活しているというのである。

だが、この立場からすれば、例えば醫師や官吏の如きも、相異つた二階級を形成することになる。げだし、彼等は二つの別個の社會集團に屬して、各成員の所得は同一の源泉から流れでるからである。同樣のことは社會的分業のために勞働者、資本家、地主の間に生ずる利益並に地位の無數の分割についてもあてはまる。例えば土地所有者たちの如きは、葡萄山の所有者、農作地の所有者、森林の所有者、鑛山の所有者、漁場の所有者等に分割される」（こゝで草

稿はとぎれている）[1]

1) マルクス「資本論」第三卷第七篇第五十二章

右の全文から直ち讀みとられることは、前にもいつた通り、階級を形成するものは何でないかという消極的な、しかも極めて簡單な說明であることである。そしてマルクスは先づ第一に、所得の同一が階級形成の契機となり得ないこと、これを反面からいえば、所得、財産の大小が階級別を生ずるものでないということを述べる。だからこの見方からいえば富者又は金持階級と貧乏階級というような表現は階級概念を誤用したものに外ならない譯である。マルクスの階級概念を以て所得又は財産の大小によるものと評した者はトーマス・マサリクを始め決して少くはないが、これらがいずれも誤解であることは明かである。

次にマルクスは階級形成の契機としての所得源泉の共通性を否定する。若し所得源泉が同一であるという理由で同一の階級に屬すると見るならば、換言すれば、所得源泉の相異が階級別の原因であるとすれば、醫師と官吏とは無論、その所得源泉が異なるのであるから當然別個の階級に歸屬するものといわなければならない。これは正當でないとマルクスは言うのである。

更にマルクスは社會的分業卽ち職業の同一が階級を形成するものではないというのである。例へば同じく土地所有者にしても葡萄山の所有者もあり、農地の所有者もあり、森林の所有者もあり、鑛山の所有者もあり、漁場の所有者もあるという風に職業によつて細分されてゆく、がマルクスはそれぞれが決して一の階級をなすものではないというのである。だから敷衍して言うと商人階級とか工業階級とかいう用語は間違つていることになるのである。しかし何故、職業の同一が階級を形成しないのであるか、そのことについてはマルクスは遂に說明しなかつたのである。

こゝで、いささかマルクスの言う所に矛盾ではないかとの疑問を感ずるのは、既に述べた如くマルクスは所得源泉の同一が階級を形成するように見えるが事實は決してそうではないと斷つていながら、前記第五十二章「諸階級」の冒頭において「それ〴〵勞銀、利潤及び地代を以て所得源泉となしているところの單なる勞働力の所有者たちと、資本の所有者たちと土地の所有者たち、換言すれば賃銀勞働者たちと資本家たちと、地主たち――これ卽ち資本制生產方法に立脚せる近代社會の三大階級をなすものである」と言つて所得源泉による階級別を是認した口吻を洩らして居ることである。この明かな自己矛盾は果してどう解決すべきものであらうか。

三

右に述べた通り、マルクスによれば階級を形成するものは第一、所得又は財產の同一ではない。第二、それは所得源泉の同一（共通性）でもない。第三、それは社會的分業又は職業の同一でもない。果して然らば何が階級を形成するか、如何なる類似が階級の本質をなすか、如何なるものが階級であるかというに、マルクシズムの理論にとつて根本的に重要なこの問題に對して、マルクス―エンゲルスの數多い著作はどこにも、これという適確な典據を與えてはくれないのである。そこでこの困難なゴルディウスの結び目を解こうとして各人各樣の判斷と解釋が行われることとなつたのである。

一般に社會科學では階級概念の規定については異說區々として定說が殆どないという有樣であるが、しかし一應、階級を以て、社會における社會的勢力の差異に基いて上下に區畫された社會集團であると見る點については殆ど異論はないようである。問題はこのような社會的勢力の優劣大小をもたらすものは何であるかということであるが、これを

或は人種、或は武力或は政治的強權、或は文化的勢力、或は經濟的勢力等に求むなど實に論議は多岐を極めて甲論乙駁の有樣である。[1] これらの論議に就ては暫くおくとして、當面の問題であるマルクスの階級概念の規定が右の中いずれの分野に屬するかは、彼のすべての理論が唯物史觀に據つている以上、自ら明かであると思う。卽ちマルクスが階級概念の說明を經濟關係に求めようとしていることは疑いないところである。而も同じく經濟關係による說明といつても、所得及び所得源泉の同一や社會的分業が階級概念を說明するとができないということは既にマルクス自らはつきりと言明しているところである。そこで殘るところはこれらの契機以外の階級的要因を探し求めなければならない譯である。このように問題を限定してくるとマルクスの階級論の存在するその方向は大體において見當がつくように思われるのである。そして、このような線に沿うことによつて始めてマルクスの階級論は正しく捉えられることであると思う。

1) この點については日高六郎「階級意識」（社會科講座第四卷）昭和三十二年、黑川純一「階級と黨派」（社會學大系第三卷、國家と階級）

このような線に沿うて、これまで、既に二三の有益な研究がなしとげられた。ドイツの正統派マルクス主義者カウツキイ、ロシヤの修正派マルクス主義者ツガン・バラノウスキイ並にわが國の高田保馬博士等がその著しい例である。

右の中カウツキーとツガンとは經濟的利益の同一を以てマルクス階級概念の本質であると解する點で同巧異曲である。先づこれについて述べよう。

カウツキーは階級を他の社會集團から區別する特徵は經濟的利益の必然的反對にあると考える。[1] 他の種社會集團では經濟的利益の一致を見ることはあるが、階級という社會集團間ではこのような經濟的利益の一致という現象は絕對に起り得ない。マルクスの階級概念の核心は經濟的利益の共通性にあると。

1) Kautsky; Klasseninteresse-Sonderinteress-Gemeininteresse. Die Neue Zeit, 21 Jahrg. Bd. II. S. 241

ツガンバラノウスキイもカウツキイと略〻同調である。彼はカウツキイに據つて、階級という概念と一般的な社會集團との異なる點は先づ種々な社會集團間の經濟的利益は一致し得るが、一階級の經濟的利益は他の階級の經濟的利益と必然的對立をするという事實に存すると同調した後に、しからば階級社會の性格的特徵であるこの不可避的な利益對の立はそも〻〻何に基くものであるかと言えばこれに對するマルクスの答は明確である、卽ちすべての階級對立は或社會集團が他の社會集團の餘剩勞働を横奪するという近代社會の根本的對立の表現に外ならない。だから社會の階級構成なるものは、その時に行われている敵對的な生產方法の社會的表現である。支拂われない餘剩勞働が存在する限り社會はその階級的性格を失うことはないであろうといつている。[1]

1) Tugan-Baranowsky, Theoretische Grundlagen des Marxismus. 1905. S. 26.

しかしカウツキイやツガンの主張する如く、單に經濟利害の對立だけでは階級概念の一屬性であるところの社會集團の區別ということは說明されるかも知れないが、しかし階級の本質的特徵である垂直的な上下關係は說明できない。經濟利益の對立抗爭なるものは例えば同じ資本家の中、產業資本家と商業資本家又は金融資本家相互の間にも容易に起り得るし、又このことは現實に目擊されるところである。このことは勞働者相互の間においても例えば職業の相異などのために現實に屢〻經驗されているところである。經濟利害の水平的な對立はそれだけでは飽、階級を形成することにはならない。經濟利益の對立を階級利益の對立たらしむるには經濟利益が水平的、並立的關係においてで

はなく、垂直的に、上下關係において對立したものとならなければならない。しからば經濟利益を上下關係、言いかえれば、支配と被支配、命令と服從という縱の關係に於いて對立せしむるものは何か、その然あらしむる素因は何であるか。こゝに先ず問題がある。そしてマルクスがこのような上下關係を餘剰勞働を繞る搾取關係として捉えていることはまことにツガンの指摘している通りである。そして彼の大著「資本論」が餘剰勞働を繞る資本家と勞働者との搾取關係を全面的に分析していることは既に人のよく知つていることである。しかしこのような餘剰勞働を繞る搾取關係は、決して「資本論」がその分析の直接の對象としている近代資本制社會にのみ固有の現象ではない。マルクス自身常にこのことを強調することを忘れない。「その形態はいかにもあれ、社會の一部分が他の部分を搾取するという一點はすべての過去の諸時代に共通の事實である」[1]即ちマルクスは階級という社會集團間の支配被支配關係を以て、餘剰勞働を繞る搾取被搾取という敵對的生産關係の社會的表現であるとみた。しかしマルクスはなおこの點で止つてはいなかつた、更に彼は餘剰勞働を繞る搾取關係の分析に進んだ。そしてその結果、この搾取關係のよつて生ずる根源が社會の所有關係にあること、搾取關係のなおその奥に所有關係という事實をつきとめたのである。こゝに所有關係というのは所有一般に關するものではなく專ら生産手段（建物、機械、原料等）の所有、非所有の意味である。この生産手段の所有非所有の事實から餘剰勞働の搾取關係が生れ、その歸結として社會勢力の不平等が生れる。マルクスは「資本論」で次のように言つている「餘剰勞働は資本によつて發明されたものではない。社會の一部の人間が生産手段を獨占している處ではどこでも自由な勞働者であると否とを問わず、いやしくも勞働者である以上は自己の生存に必要なる勞働時間以上になお、生産手段の所有者のために生産資料を生産すべき超過勞働時間を追加せねばならぬ。これは生産手段の所有者がアテネの貴族であるにしろ、エトルリヤの政僧にしろ、ローマの市民であるにしろ、ノルマンの領主であるにしろ、アメリカの奴隷所有者であるにしろ、ワラキヤの領主であるにしろ、近世の地主又は資本家であるにしろ、いずれにしても區別なく行われるところである。」[2]

1) 「共産黨宣言」（第二節）　2) 「資本論」第一卷第三篇第八章勞働日

マルクスによれば餘剰勞働を繞る社會集團間の搾取關係は專ら生産手段の所有關係に基因するものである。生働手段の所有者はその所有權によつて、勞働力以外に何物をもたない勞働者に餘剰勞働を強いて、その成果である餘剰價値を搾取する。勞働者は生産手段を所有しないという事實によつて餘剰勞働を強いられ、そして餘剰價値を搾取されるまゝに甘んじなければならぬ。「若しも勞働力の所有者が、自分の使用する生産機關の所有者であり、且つ彼自身勞働者として生活することに甘んじているものとすれば、彼はその生活資料の再生産に必要な時間以上に勞働することは要しないのである。」[1]生産手段と直接勞働者との分離、即ち勞働者が生産手段を所有しないことが勞働者を悲慘な被搾取の狀態に置くものであるという説明はこゝに引證するまでもなく「資本論」を始めとして彼の著作に殆ど全般的に見出されるところである。

1) 「資本論」第一卷第三篇第九章餘剰價値の率と量

かくて搾取關係の基因は明かにされた。マルクスはこれを生産手段の所有關係に見出したのである。社會の成員を上下の社會集團に分割歸屬せしめ、相互に對立せしむるものは、單なる經濟利益の對立でもなく、搾取でもなく、實この生産手段の所有關係に外ならないのである。從つて階級のよつて生れてくる根本の部面は生産關係であるということになる。

以上のような分析から結果を綜合して、マルクスの階級概念を次の如く描き出すことができると思う。即ち階級と

は生産手段の所有非所有に關して同一の地位に置かれた社會集團であると。問題は生産手段の所有關係に基く地位の共通（共同）ということであつて、階級の成否は一つに懸つてこの點にあるということができよう。生産手段の所有關係に基いて、搾取關係が生れ、それから當然社會勢力の大小が生じて、上下の對立關係が生れ、かくして利害を同じうするものが相互に分れて集團を形成することとなるのである、無論マルクス自身は前にも言つた通り、どこにもこのような見解を判然と説明してはいないが、彼の斷片隻句を綜合すると、恐らく、右述べた所がマルクスの眞意に近いものではないかと思う。

高田保馬博士の論文「マルクス的階級概念」は前記のカウツキイやツガン或はクノウの研究よりも遙かに勝れた系統的研究であると思う。博士はマルクス階級概念に關する諸説を順次檢討した後、マルクスの階級概念の本質を以て「生産關係上の位置の同一」[1]であると論斷されている。たしかに一個の見識である。ブハリンの見解も亦同巧異曲である。[2]しかし私はこの種の見解に同調することはできない。「生産關係上の位置の同一」という博士の見解はマルクスの階級概念の規定としては、聊か漠然としすぎてはいないかと思う。

1) 經濟論叢、第十六卷第一號

2) Bucharin, Theorie des historischen Materialismus. 邦譯 505

思うに現實の生産關係は複雜多樣であつて、例えば銀行家、製造業者、商人、技師、勞働者、消費者、販賣者、番頭、事務員、船主、職工長等々の相互の關係――これらはいずれも生産關係であるが、これらの關係は實生活においては互に深くもつれ合い、極めて複雜な組合せをなし、最も不思議な形で結合している。このような複雜な生産關係を單に無限定な「地位の同一」という因子で通約して見ると、そこには種々の社會集團が分類されてくるであろう。それを悉く階級と呼んでいいであろうか。そのような社會集團が相互に勢力的に上下關係に立つているであろうか。私はこの點を深く疑問視するものである。「生産關係上の位置の同一」はいさゝか曖昧不精確と思う。もうと限定されなければならない。即ち何が「生産關係上の位置の同一」を結果するか、「生産關係上の位置の同一」を生ぜしむるものは何であるかを更に説明し、限定すべきである。そして「生産手段の所有に基く生産關係上の位置の同一」と補正すべきであつて、かくて始めてマルクスの階級概念は正しく規定されるのではないかと考えられる。

四

マルクスは階級の形成過程を前後の二段階に分けている。

マルクスの「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」（一八五一年）は一八四八年の二月革命並にその後におけるフランスの政治的、社會的運動及びこの運動で當時の諸社會階級が演じたそれ〳〵の役割を詳細に分析した著作であつて、特にマルクスの階級觀を窺う上において極めて重要な資料であるが、その中に彼がフランスの零細農について論じた一節に次のような章句がある。

「ボナパルトは一つの階級、しかもフランス社會の最大多數の階級である零細農を代表しているものであつた。[1]」

1) マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』邦譯マルクス＝エンゲルス全集第五卷二一三―二一四譯文筆者

しかも、そういう口の下からマルクスは又零細農は、或る意味に於ては何等の階級でないとも言明している。即ち「幾百萬の零細農の家族が、その生活樣式とその利害、その教養とをその他の階級から切り離し、そしてこれらの諸階級と敵對的に對立せしむるような經濟條件の下に生活している限り、彼等は一つの階級を形成する。けれども零細

農の間にはたゞ單なる地方的連絡が存するばかりであつて、彼等の利害の同一が彼等の間に何らの共同一致と何らの國民的結合と何らの政治的組織をも生ぜしむることがない限り、彼等は何ら階級を形成するものではない」[1]と。

1) 邦譯マルクス＝エンゲルス全集第五卷二一四、譯文筆者

即ち零細農なるものは或る意味では階級であるが他の意味では又階級ではないということになり、結局それが果して階級であるのか、ないのか判明しなくなつてしもうのである。しかし「彼等の利害の同一が彼等の間に何らの共同一致、何らの國民的結合、何らの政治的組織をも生ぜしむることがない」という理由で、零細農なるものが階級でないとすれば、自然、プチ・ブルジョワの階級資格も亦疑わしくなつてくる。ボナパルト二世當時のフランスの零細農と同様に、三月革命當時のドイツのプチ・ブルジョワも亦獨自の政黨を組織する力をもつていなかつたことは同じくマルクスが「革命及び反革命」（一八五二年）の中で分析している通りである。そこでプチ・ブルジョワも亦或る意味では階級ではないということになる。この筆法でゆくとマルクスが近代社會の内部に見出した多數の社會階級の中には「或る意味において階級でないものが澤山できてきて、結局、ブルジョワ社會を土地所有者と資本家と勞働者の三階級に分けるというアダム・スミスの分類法が正しいということに落着きそうであるが、しかしこれも、よく考えると必ずしも正しいとはいえなくなる。それは勞働者の階級資格が決して確實とはいえないからである。無論マルクスは勞働者、プロレタリアのことをば幾度も特殊の社會階級として取扱つている。上に述べた通り農民やプチ・ブルジョワが或る意味で階級でないとすれば、一定の發展段階に達する以前のプロレタリヤについても同様なことがいえる譯で、これを一の階級とみなすことはできない筈である。現に「共産黨宣言」の中でも、この宣言の起草當時、プロレタリヤは尚まだ何らの階級でなかつたことが明かに述べられている。即ち「共産主義者の直次の目的は他のすべてのプロレタリヤ黨のそれと同様であつてプロレタリアをば階級に結成することにある。…プロレタリヤをこのように階級に結成し、從つて又政黨に組織することはいつも勞働者相互の間の競爭によつて再び破られる」[1]というのであるが、もし、こゝに言うが如く、プロレタリヤの階級への組織が果して尚、まだ達成されてない目的であるとすればプロレタリヤは當時まだ差し當り階級ではなかつたということになる。まことに不可解という外はない。マルクスは自己矛盾に陷つたのであろうか。われ〳〵はこの疑問をどう解くべきであるか。

この一見してわれ〳〵にはどうしても矛盾としか思われない疑問を解いてくれるものはマルクスの「哲學の貧困」（一八四七年）にある左の一節であろう。「經濟的關係は先ず國民大衆を勞働者に轉化せしめる。資本の支配はこの大衆に對して一の共通の地位、共通の利害を造りだした。かくして、この大衆は既に資本に對しては一つの階級ではあるが、まだそれ自身としては階級ではない。……闘爭においてこの大衆は相結合する。それはそれ自身として自らを「それ自身のための階級」として構成する。彼等が擁護する利害はかくて階級利害となるのである。しかし階級對階級の闘爭は一つの政治的闘爭である。」[1] 同様のことをマルクスはブルジョワジイについても述べている。ブルジョワジイにおいて、われ〳〵は二つの局面を區別しなければならない。即ちブルジョワジイが封建制度と絶對君主制との下において自己を階級に構成する段階と、すでに階級として構成されたブルジョワジイが進んで社會をブルジョワ社會にするために封建的支配と君主制とを顚覆したその段階とがそれである。この二つの段階の中、前者がより長期にわたり又それに要した努力も亦より大であつた。この段階も亦封建領主たちに對する部分的團結を以て始まつたものである。[2]」

1) 邦譯マルクス＝エンゲルス全集　第三卷五六九譯文加筆

2) 邦譯マルクス＝エンゲルス全集第三卷　五九九　譯文加筆

以上「哲學の貧困」の章句を熟讀して見ると、さきに矛盾としか思われなかつたマルクスの言明に對する疑問が解けてくる。即ちマルクスは、すべて社會階級は當初から成熟した實體として姿を現わすものではなく、必ずまず、無自覺の、構成分子相互の間にはまだ何らの結合力をもたない漠然不確定な單なる物理的構成物であつて、無論その構成分子は共同の地位について漠然たる本能的感情をもつてはいるが、まだ自己特殊の經濟的地位、共同利害による結合、他階級との對立意識、即ち眞正の階級意識をもたない段階とやがて自己特有の地位と利害とにめざめて、成員相互の間に團結力を體得するという段階とをもつものであつて、社會階級は、後者の段階に至つて始めて階級として完成するものであると考えていたのである。即ちまづ「それ自身のための階級」となることなく、他の階級に對立してのみ階級となる段階である。次いで「それ自身のための階級」として自らを構成する。がこの段階を以て社會集團の階級への組織は完了することとなる。さきにマルクスがフランスの零細農の階級資格を否認した眞意は、零細農がまだ「それ自身のための階級」を構成するに至つていなかつたということを言わんとしたのであろう。又「零細農が一つの階級を形成する」といつたのは彼等がともかく他の階級に對立した地位に於ては既に階級を成していたからである。同樣にプロレタリヤ自身も亦、「共產黨宣言」起草の當時においては、尙「それ自身のための階級」ではなく、只ブルジョワジイに對立した客觀的な物理的存在としてのみ階級をなしていたのである。「プロレタリヤを階級に組織する…」とマルクスが言つているのはこの事情を豫想したものであり、これと關連して始めて意味のあることである。

1) Das Kommunistische Manifest. Kautsky's Ausgabe. 1921. S. 33. 34.

このようにマルクスは社會階級の形成過程に階級意識のない段階即ち「他に對する階級」(Klasse für andere) の段階と既に階級意識をもつ段階即ち「それ自身のための階級」(Klasse für sich) の段階のあることを說いているが、このように「他に對する階級」と「それ自身のための階級」とを區別するというマルクスの表現は、容易に推測されるように、明かにヘーゲルの純粹實在論に立脚しているものである。ヘーゲルの辨證法によれば、純粹實在なるものはその否定によつて他に對する實在となり、更に否定の否定によつてそれ自身のための實在に轉化するというのである。マルクスが同一の社會集團を初めは階級と呼び、しかる後にこの資格を拒んでいるのであるが、それはつまるところ同一の社會集團をその通過する異つた發展段階から問題を觀察し、判斷した結果であつて、あたかも或る動物の幼蟲をその成蟲に比較對照していう場合には專ら幼蟲の名を以て呼ぶが、他の種類の異つた動物に比較していう場合には成蟲の名を以て呼ぶのと同樣である。[1] 更にこれを勞働階級の場合についていうと、勞働階級は、既にその階級的性質を可成りに發展させ、そして資本によつて、即ち資本家階級によつて既に、かれらと本質的に異つた新興の階級として認められてはいるが、しかも勞働階級自身はなおまだその特殊の階級的性質を意識するには至らず、即ち彼等の特殊の地位及び特殊の利益の意識にまで到達せず、それ故に尙まだそれ自身のために獨立の政黨を結成するに至らないということである。これがマルクスの意味する勞働階級の「他に對する階級」の段階である。

1) Tugan-Baranowsky, op. cit., S. 25.

マルクスはこのような段階における勞働者階級の歷史的實例として、一八四八年三月革命前夜のドイツ勞働者階級を擧げている。即ち彼は「革命及び反革命」の中で次の樣な意味のことを述べている。ドイツの勞働者階級の社會的、政治的發達は恰もドイツのブルジョワジイがイギリスやフランスのブルジョワジイよりも後れていると同程度に後れていた。當時ドイツの資本制生產方法は强力なるブルジョワジイに對立する强力なプロレタリヤ階級を育成する

に必要な生産力を解放するに足る程にはまだ進歩してはいなかつた。[1] これらの二の階級は單に生産關係における二つの異質的な實體というだけの理由で階級であつたのあつて、尙まだ階級意識をもつには至つていなかつたのである。

1) 邦譯マルクス―エンゲルス全集　第五卷二三七

マルクスは又同樣なことを「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」の中で一八四八年二月革命前夜のフランス農民について述べている。これによれば、フランスの零細農は尨大な大衆をなしていて、この利害は同一であつたにかゝわらず、相互間に多樣な關係を結んではいない。かれらの生産方法は、彼等を相互に接觸させないで、互に孤立させている。農民の家族は殆ど自給自足で、その消費の大部分を直接自ら生産し、かくて、その生活資料を社會との交易によるよりも、むしろ自然との交換によつて獲得する。一つの分割地には農民とその家族、それと隣り合つて他の分割地には他の農民とその家族という工合で、これをよせ集めたものが村となり、村の澤山集つたものが縣となる。かようにフランス國民の大衆は、同じ大きさのものをたゞ加算したものからなり、それは丁度一袋の馬鈴薯が馬鈴薯一袋をなすようなものである。幾百萬の家族が、その生活方法、利害關係及び文化の程度を他の階級と異にし、彼等に對して敵對的ならしむるが如き經濟的生産條件の下に生活を營む限り、それらの家族は一階段を形成する。けれども零細農の間にはたゞ單なる地方的連絡が存在するばかりであつて、彼等の利害の同一が彼等の間に何らの共同關係、何らの全國的結合、何らの政治的組織をも生ぜしむることがない限り、彼等は何ら階級を形成するものではないのである。[1] この零細農は社會の他の階級に對向する客觀的な存在である限り、すでに一階級を形成するものであつたが、尙、自ら何を欲し、何を得んとするかを知り、自己の特性、他の階級に對する自己の利害の對立等を自覺している、獨立した社會力として存在してはいなかつたのである。それ故に彼等は自己の階級利害を自己の名によつて主張する能力をもたない。彼等は自ら代表することができないで他の階級によつて代表して貰わなければならないのである。[2]

1) マルクス―エンゲルス全集　第五卷二一四

2) 邦譯マルクス―エンゲルス全集　第五卷二一四

「他に對する階級」が「それ自身のための階級」に進展するには生産方法のより大なる發達をまたなければならない。産業の發達に伴つて勞働者階級は單に數量的に增加するばかりでなく、その實力を增大し益々その力を自ら感知するようになる。機械が次第に勞働の差違を抹消し、賃銀を到る處において平等の低い水準にひき下げるので、勞働者階級の内部における利害、生活狀態は漸次平均してくる。ブルジョワ相互間の激化する競爭及びそれから生ずる商業恐慌が勞働者の賃銀をいよ〳〵動搖させる。益々急激に發展する絶え間なき機械の改善が勞働者の全生活狀態をいよ〳〵不安にする。個々の勞働者と個々のブルジョワとの衝突は次第に二階級の衝突たる性質を帶びてくる。そこで勞働者はブルジョワに對抗する聯合を作り始める。勞働者の團結は大工業によつて作りだされる交通機關の發達によつて促進される。[1] 共同利害の認識が生じ、階級感情が起る。自己の利益を貫徹するにはこれまで寄生し、便乘した政黨を離れて、自ら獨自の政黨を組織すべきことを知るに至る。こゝに鬪爭は政治的色彩を帶びてくる。かくして、これまでの漠然とした階級感情は成長して、自ら勞働者として、社會内部の獨自の階級をなして他の階級と根本的に異なる利害をもつものであるという自覺即ち階級意識に目醒める。こゝに「それ自身のための階級」が形成される。ことに始めて眞の意味の階級が成立する。このようにマルクスは考えていたようであるが、彼の表現方法が粗略であつたために後代に種々の誤解を招くに至つたのである。マルクスによれば社會階級も亦他の一切の社會現象と同樣に社會發展の法則を受けるものであつて、一階級の各發展段階は他の段階のもたないそれ自身の性格的特徴をもつものであるというのである。そして、このことは彼の階級鬪爭論を正しく理解する上において常に注意していなければならないことである。

1) 邦譯共産黨宣言三七